

# 校異源氏物語における「はへし」「はへりし」「侍し」「侍りし」等について

岩 瀬 法 雲

## 一

源氏物語大成校異篇の本文には、「侍りし」について、表題のような表記が見える。大部分は「侍し」で、まれに「侍りし」がある。かな書きは特別の場合のようである。「はへし」については同索引篇助詞・助動詞の部には13例しか見えない。同様の表記「はへめり」1、「はへめる」2、「はへめれ」2、「はへなむ」1、の6例を加えても19例にすぎない。(もっとも同索引篇一般語彙の部にはこの外になお34例があるから、計53例ということになる) そのため活字本では日本古典全書でも、大体「侍」の漢字を当て、その下に一般的な活用語尾を送ってしまっているが、果してそれでよいのであろうか。「侍し」は「侍りし」とは同じ発音であつても、「はへりし」とはちがつていたようである。だからこそわざわざかな書きにしたのである。「はへし」に至っては更にちがつていたはずである。発音が違つていたとすれば、当然ニュアンスは異なる。源氏物語のように、人間の心理を微妙に書きわけようとしたものには、そうした点にも作者の意図があつたのではないかと思う。

たとえば今日でも、「ございます」「ござります」「ござんす」「ござあます」と、ニュアンスはそれぞれに異なる。「ござります」や「ござ

あます」に注意すれば、案外その時、その場の空気は勿論、その人物の心理や性格までもつかめるのではないだろうか。

## 二

上記19例のある場所は次の通りである。

巻	回数	大成校異篇頁	古典書段	話手	内 容
帝 木	1	五五九	12	馬頭源氏ら	女についての失敗談をいろいろと申しあげ、これこれの女は用心なさるやうにとご忠告に及ぶ所に。
薄 雲	1	六二八五	34	源氏秋好中宮	春秋のながめには古来唐土わが朝とその優劣を論じているが、あなたはどちらにと、おききする所に。
常 夏	1	八三九二	8	少将父内大臣	近江君の評判のよくないのに対し、源氏の引きとつた玉鬘の評判のすばらしさを語る所に。
常 夏	1	八四九一	15	中納言君女御	近江君が女御にさしあげた手紙の返とばについて、代筆を承つた女房のこ
行 幸	1	八九三三	10	源氏大宮	源氏は玉鬘の真相を内大臣にも大宮にも明かしたいと思つて、まず大宮に申しあげる所に。

真木柱	○	2	九四七六	15	髭黒玉鬘	北方の突然の狂乱に、玉鬘を訪ねることのできなくなつた詫び状の中に。
若菜上		1	一〇三五13	14	乳母朱雀院	女三宮降嫁について、源氏のことを申しあげることばの中に。
○若菜上		1	一〇九五2	94	明石入道明石上	明石誕生にまつわる霊夢の実現を喜ぶ手紙の中に。
若菜上		1	一〇九八9	98	明石尼君明石上	その手紙を見て、尼君が入道とつれそつた身の上を話す所に。
若菜上		1	一一〇三8	103	明石上源氏	源氏に文箱を見つけられて、入道から言つて来た最則のことばを話す所に。
柏木		1	一二四一9	22	朱雀院源氏	源氏の背んじなかつた女三宮の出家を許し、授戒を終えて帰られる所に。
柏木		2	一二四六11	29	柏木夕霧	夕霧にするわが罪の告白と遺言の中に。
宿木		4	一七三三11 一七三八6 二五・二11	63.49.46	薫中君	今は人妻である中君に、心中を披瀝したり、袖を濡えたり、言いくい妊娠のことを話したりする所に。
手習		1	二〇四九5	73	薫中宮	浮舟の生きていることを聞かされて、自分もそのように思っているところを申しあげる所に。

計 19 ○印は消息文

以上の用例について、一々の場面を検討すれば、そのことばの必然性が捕えられるはずであるが、今その中二、三の例を取り上げてみる。

三

髭黒大將が玉鬘を訪ねようとして、心もいそいそと袖に香をたきめたりしている後から、突然北の方が火取りを浴びせかけたため、折角の期待が外れてしまった。訪ねなかつたことを先方ではどんなに思っているかと心配して、北の方の発作のおさまる隙に書いた手紙は、

よべにはかに消え入る人の<sup>A</sup>はへしにより雪の気色もふり出で難く、やすらひは<sup>B</sup>へしに、身さへ冷えてなむ。御心をばさるものにて、人いかに取りなし侍けん。

と、きすぐに書き給へり。(真木柱 大成巻・5・6 全書15段)

傍線のところのみ大成校異篇の本文に依る。他は全書から写す。(以下同様)

校 異

青	大(底本) 御横為	河	七宮平大鳳尾	別	陽保長麦阿
A	侍しにより(為門)	侍しに(河)	侍に(麦阿)		
B	侍しに(御為門)	○	○		
C	○	○	○	侍らん(長)	給けん(麦阿)

校異は、大成の校異による。ABCはそれぞれ傍線の箇所のことば、○印は傍線のことばと同じであることを示す(以下同様)

傍線Aについては、青表紙本二本と河内本六本と別本二本の外は、すべて校異篇本文(大島本)のまま、Bの方は、青表紙本三本の外は、全部その本文の箇所と一致し、Cは、別本二本だけに違いがあるだけで

「侍」に関する限り一本だけとなって共通性が強くなる。

この手紙を髭黒は「きすぐに書」いたとある。「きすぐ」については、湖月抄に河海抄の「木強」孟津抄の「ありのままの文也」を引いているが、少なくとも「ありのまま」ではない。対校源氏物語新釈の索引には、この語が他に4例ある。

ここにてはいとまめに、きすぐ人にておはす（初音一一頁・13）

兄の阿闍梨に折角の毛皮の衣まで与えてしまった末摘花の前での源氏である。

うひうひしう、きすぐなるさま（真木柱二頁・7）

これは同じく髭黒。

こはごはしう、けどほげなる宿徳の僧都僧正の際は、世にいとまなく、きすぐにて（橋姫一五頁・13）

これは高僧

更に更に乱れそめじの心にて、いときすぐに（総角三五頁・8）

これは薫

傍線の修飾語が自らこの語の意味を暗示しているように、きまじめな、物慣れない、無骨で親しみにくい、極めて几帳面な態度を意味する。対校、全書、岩波古典文学大系は等しく「生真面目に」と注している通りである。末摘花の前での源氏といい、髭黒といい、高僧といい、薫といい、各人物の人物を一語で表わしている気がするのであるが、髭黒のために5回の中2回まで使われているのも、この人物らしい。しかも、その手紙の書き様である。

白き薄様に、づしやかに書き給へれど、殊にをかしき所もなし。手はいと清けなり。さゝかしくなどぞ物し給ひける。

どつしりとしているが、その書風は無風流である。しかし品を失わない。これは同時に手紙の文体でもある。「きすぐに」とある所以である。それはすべて彼の優れた漢字についての教養から来しているとある。「侍し」でもなく「はへりし」でもなく、特に「はへし」を二回まで繰り返したのはそのためではなからうか。もっとも玉鬘の方では、彼の「夜がれを何とも思」っていなかったたので、彼が「心ときめきし」て書いた手紙に、返事もしなかった。

#### 四

明石女御が東宮に参つて若宮を産み、長い宿願のかなった明石入道が、時機到来を知り、この世から姿を消すことを宣言して、最期の手紙を明石上に書いた。その中に「侍り」が20箇所ある（若菜上 大成二〇四〜二〇六 全書94段）

#### 校 異

一〇四・三		侍りつれ	
7	侍る	侍□（御）	侍めれと（平）
8	侍らす	○	侍れと（阿）
14	侍し	○	侍しに（御）
		○	○
		○	○
		○	○

青大（底本）御横陽  
池国肖三  
河高尾平  
鳳大  
別保阿

一〇五・2はへしを <sup>A</sup>	侍しを(御横陽池園)	○	○
2侍しにも	はへし(陽)	○	○
3侍しかは	はへしかは(陽・池・三)	○	○
5侍にし	侍にし(御)	○	○
6侍て	○	○	○
7侍し	○	○	をへし(阿)
7侍しかは	○	○	○
8はへりし <sup>B</sup>	はへし(横陽池三)	○	○
10侍らむ	○	○	給はん(阿)
10侍りぬれは	○	○	侍りナシ(阿)
12侍りぬれは	○	○	侍め(降)
12はへる <sup>C</sup>	○	○	○
13侍らむ	○	○	奉らん(阿)
一〇六・4侍る所	○	○	給ふ(阿)
4侍なは	○	○	ナシ(阿)
4侍りなむ	○	○	○

活用語尾の表記はとにかく、20例中17例まで漢字一侍一であるのに対して、3例だけがかな書きであり、Cは諸本一致し、Bは青表紙本の四本まで「はへし」になっているのに対し、Aは青表紙五本は「侍しを」ではあるが、河内本、特に別本まで、ともに「はへし」であることに注目される。

これは入道個人の口癖なのかと思つて明石巻を見ると、入道が源氏と

話を交わす所に45回「侍り」がある。ところで校異篇の本文(大島本)は、活用語尾のいかに拘らず漢字「侍」を当てている。これは河内本も一致している。(この巻は別本は採扱されていない)ただ青表紙本中、横山本に3箇所例外がある。

後の世に願ひはんへる所の有様も、思う給へやらるる夜のさまかな。

(明石 大成聖・11 全書10段 傍線以外は全書のまゝ、以下同様)

入道が源氏の琴の妙技を称めて、極楽浄土の様もかくやと言う所である。

あやしうまねぶものはんへるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひて侍れ。(同 大成聖・14 全書10段)

娘の箏の技倆を自慢する所。

つぎつぎさのみおとりまからば、何の身にかなりはんへらむ。(同

大成聖・3 全書11段)

親は大臣の位を保ったが、こうして田舎の民となり下がっては、子孫はどうなるだろうかと思つて嘆く所。

ところで、入道の最期の手紙というのは、男宮の生誕を「深くよろこび申し侍る。そのゆゑは」とあつて、昔明石上が生まれるに当つて、入道が見た不思議な夢の実現であつたと述べ、これで自分も思い残すことがないのでいよいよこの世から姿を消すと言ひ、追面書に頼みおく後のことどもを書いている。不思議な夢というのは、

わが御許うまれ給はむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、自ら須彌の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世をてらす。自らは山の下の方の蔭に隠れて、その光にあたらす。山をば、広き海に浮べ置きて、ちひさき船に乗りて、西の方をさして漕ぎ行く（若菜上 全書94段）

須彌山は世界の中央にある山、明石上を表わし、左右の月日は中宮と東宮を表わす。この夢のすばらしさに對して、現実の自分が余りにも隔たりすぎるというので、

何事につけてか、さる厳しきことをば待ち出でむと、心の中に思ひはへしを、その頃より孕まれ給ひにしこなた（同 大成〇五・2 全書94段）

次に、夢の信すべきことは内外の典籍にその例多く、賤しい身ながらも大切に養育したけれども力及ばず、思いあぐんでこんな田舎に下りしたものの、

心ひとつに多くの願を立てはへりし（同 大成〇五・8）

といい、いよいよ年来の宿願がかないそうなので、安心して極樂往生も出来るというので、

今はただ迎ふる蓮を待ち<sup>C</sup>はへる（同 大成〇五・12）

一体入道がこの手紙をどんな氣持で書いたか。追而書に、

ただわが身は變化のものと申しなして、老法師の爲には功德をつくり給へ

かねがねわが娘を仏の申し子のように思っていたのが、一音楽の妙技もそのためである——今回若宮誕生のことがあつて、いよいよわが娘でなく、仏の化身と思うようになったことが分かる。その氣持が手紙のことばの端々にも見える。

男宮生れ給へる由をなむ、深くよろこび申し侍る。

「申し」は「聞え」より敬意が強い。「返り申」「罷り申」「申文」といえば、もと神仏や朝廷に言上することに用いた例でも分かる。助動詞になつても敬意は同じである。

蓮の上の露の願をばさし置きてなむ念じ奉りし

賤しき懷のうちにも、かたじけなく思ひいたづき奉りしかど

この浦に年頃侍りし程も、わが君を頼むことに思ひ聞え侍りしかば水草清き山の末にて、つとめ侍らむとてなむ罷り入りぬる

一方この手紙を、作者自身評して、

この文の詞いとうたてこはく、にくげなるさまを、陸奥紙にて、年経にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書き給へり。（若菜上 全書二〇二段）

対校の注には「手紙の文言はいやに堅苦しく、なつかしみのないもの

であるが、それをまた（やばな）陸奥紙の古くなって云云」、大系も同じであるが、全書には、「にくげなる」を「粗野な」とあるがどうか。「男君もにくからず、愛敬づきて笑みたる」（枕草子、正月十五日の粥の木の段、春曙抄本）、それが、三巻本には「男君もにくからず、うち笑みたる」とある。「愛敬づき」は「にくからず」と同意語のように見える。すると、「にくげなる」は「愛敬づき」の反対語と見てよいことになる。

陸奥紙はいうまでもなく奉書紙の一種で、末摘花のもてあそび物に「うるはしきかむや紙陸奥紙などのふくだめたるに、ふるごとどもの目馴れたる」（蓬生）とあって、「せめてながめ給ふ折々は、引きひろげ給ふ」とある。いかにも末摘花の物に適しい。「陸奥紙は紙屋紙とともに儀式的な場合に用い、風流には殆んど用いない。模様などもなく、きちんとした型通りのもの」（大系）である。

入道の手紙はそうした料紙に適しいことば遣いであつたと言うのである。これは同時に手紙の内容の性質を物語るものでもある。

「はへし」はどう発音されたにしろ「侍りし」の音便である以上、何か崩れた感じを表わすのではないかと疑う人があつたが、事實は、見て来たように全くその逆である。

もしも対校（本文は湖月抄本）が、その校異に用いた尾州家本によるなら、明石巻の対話に2箇所「はへ」がある。――本文の方は「侍り」。此処にも知らしめす事はへつらむ（P 65）

夢のお告げで、船をもつて源氏を迎えに来たとき、入道が言ったことは、

琵琶なむ誠にねを弾きしづむる人、古へも難うはへしを、なさをき滞ることなく（P 75）

娘が、至難な琵琶も立派に引きこなすと吹聴することは。

これに對して、その尾州家本は若菜上巻の手紙の方には3箇所ある。

この方は本文も「はへりし」とかな書きであるのが先と異なる。

夢を信ずべき事多くはへしかば（若菜上 P 云々）

あが君を頼む事に思ひ聞えはへしかは（同上）

心一つに多くの願を立てはへし（同上）

他に1箇所、「はへり」がある。

ぞくの方の書を見はへりしにも（同上）

以上、対校の尾州家本では、かな書き「侍り」の使用状態は対話では45回中2回（大成本文〇回、横山本のみ3回）、手紙では、20回中4回（大成本文3回）という比率になる。いずれにしても手紙の中に多いのは、手紙の異常な内容と、その相手を今更に仏の化身と信じようになつたことからに違いない。

## 五

柏木が活躍するするのは、若菜巻上下と柏木巻とである。今、大成の校異篇の本文について三つの巻から柏木が使用した「侍り」の状態を見ると、若菜巻上6、同下40、柏木巻27、計73回である。その中、かな書きは、若菜巻上2、同下0、柏木巻14、計16、その比率は2対6、0対40、14対27で、かな書きは柏木巻に集中していることが分かる。

若菜巻上の2というのは、源氏から蹴鞠の手腕は親譲りだと賞められ

て、いたく恐縮して、

はかばかしき方にはぬるく侍る家の風の、さしも吹き伝へ侍らむに、  
後の世の為異なる事なくこそはへりぬべけれ大成二七・1 全書二六段

青 ○ 河 ○ 別 侍りけれ(阿)

遊びの後、夕霧と同車して帰る途中、先刻ふと見た女三宮のことに心を奪われ、宮の境遇をうわさして、源氏は紫上ばかりを愛して宮はお気の毒だと言うと、夕霧は、とんでもない、と、話を外らそうとした時、

いで、あなかま、たまへ。皆聞きてはへり。いといとほしげなる折々あなるをや。さるは世におしなべたらぬ人の御おぼえを。(大成二六・3 全書二九段)

青 侍り(御横陽池国肖三) 河 ○ 別 ○

と、相手を強く遮ぎって、同情した中に見えるのである。

柏木巻の14回は次の通りである。(大成二六・三四〜三三七)

# 校異

1228・10 をはへらん	青定(底本)大 横欄陽肖三	河宮尾平 大鳳	別御保国 麦阿
○		○	侍へらんものを (国)

1245 1244

1246

1247

13 はへりけ るも	12 はへりけ れ	5 き はへる べ	4 はへら は	1 はへし はへりし 侍(大横 陽肖三)	13 はへりて	11 はへしに	10 をへりし	8 むも	7 はへれ と	2 はへる	1 はへりや	8 みはへる つ
○	○	○	○	○	○	侍しに(大横 陽肖三)	○	○	○	○	○	○
侍けけるも(平)	○	○	○	○	給て(尾平 大鳳)	○	○	○	○	○	○	○
思ひのとめはへり けるもし侍り さるける(国)	へうこそはへりけ れへかりけるも のを(国)	○	○	○	侍しを(保国)	給て(御)	○	侍らす(国)	給ふれと(保)	侍(阿)	○	○

最初の1回は女三宮へ最後の訴えの手紙である。

今は限になりにて侍、有様は、自ら聞召すやうもはへらんを、如何なりぬるとだに、御耳とどめさせ給はぬも、道理なれどいと憂くも侍かな。(大成二六・10 全書2段)

それを書く柏木の状態は、「いみじうわななけば、思ふこともみな書きさして」とある。後の13回は、病床を見舞いに来た夕霧に話した中にある。特に罪の告白と後事を頼む遺言に集中している。話が重大事に關係するからである。

#### 告白―

六条の院にいささかなる事の違日ありて、月頃心の中に、かしこまり申すことなむはへりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病ひづきめとおぼえはへしに、召ありて、院の御賀の、楽所のころみの日まゐりて、御氣色を賜りしに、なほゆるされぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見奉りはへりて、いとど世にながらへむ事もはばかり多う覚えなり侍りて、あぢきなう思う給へしに、心のさわぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ。(大成二四六・10・11・13 全書29段)

#### 遺言―

人数には思し入れざりけめど、いはけなうはへし時より、深く頼み申す心の侍しを、いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世の憂にて残り侍へければ、論無うかの後の世のさまたげにもやと思ひ給ふるを、事のついでではへらは、御耳とどめて、よろしうあきらめ申させ給へ。亡からむ後にも、この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはへるべき。(大成三三三・1・4・5 全書29段)

傍線・傍点の箇所は校異篇本文(定家本)のまゝ

柏木にとっては、彼が活かされるも殺されるも源氏の目つき一つに懸かっていた。彼が源氏に対して、「かしこまり申す」「頼み申す」と「申す」を繰り返すのはそのためである。「申す」が「聞ゆ」と異ることにについては入道の手紙の所で述べた。その目つきに恐れをなして、生きることに憚りを覚え、不治の病に取り着かれてしまったので、「病ひづきめとおぼえはへしに」と特に改まったのであろう。また、このままでは後世の妨げともなるからというので、夕霧に弁解を頼むに當って、「いはけなうはへし時より」と同じく改まったのであろう。「へし」の発音については後にふれる。

こうした内容を夕霧に話しているのであるが、元来夕霧とは親交の仲である。「早うよりいささか隔て給ふことなく、睦び交し給ふ御中」(全書28段)とある。現に、若菜卷上二五段で、夕霧に女三宮のうわきをする会話の所でも、例の、「皆聞きてはへり」以外は二人とも、「侍り」ぬきである。そうした仲であるのに、今、「いと口惜しう、その人にもあらずなりにてはへりや」(大成二四三・1 全書28段)といって、「烏帽子ばかりおし入れて」せめてもの礼儀を示す。しかし、「すこし起きあがらむとし給へど、いと苦しげなり」とある。相手は「重々しい」貫禄のある夕霧だからでもあるが、心では頻りに会いたいと思ひ、段々弱って来ることを心配する彼には、この機会を外してはと思うものがある。そうした気持で話しているので、初めから固苦しさが付きまわっている。それが、地の文「枕上の方に、僧などしばし出し給ひて、入れ奉り給ふ」の「奉り」にも反映し、更に最後の「御徳にはへるべき」



(大成三三・5 全書29段)の「御徳」に見える。対校の索引によるとこの語は10例ある。内2例は「財産」(東屋巻)の意らしいので除くと、残りは全部「恩恵」である。「宮の御徳」(若菜上) 1、「神の御徳」(浮標) 1、「君の御徳」(須磨・閑屋・少女) 各1、これらはともに召使われる者、または召使われた者から源氏を仰いでである。あるいは入道が仏の化身だという明石上に対して、尼君が感謝して(若菜上) 1、近江君が父内大臣を仰いで「御徳をまかうぶり」(行幸) 1、以上の7例は、みな恩恵を施すものと受けるものに身分に大きな差のあることを示す。所が残る1例のこれは相手は親友である。柏木の心理には今の夕霧に、罪の自覚からそれ程の距離が感じられるのであろう。その固苦しさが、「侍り」をかな書きにしなければならぬような発音となつて、そこに集中したのに違いない。このことは明石入道が娘を仏の化身と信じていることから、同じことば遣いをしていことも通じる。入道のは言わば遺言であつた。今の柏木のもまた遺言である。人間が一生の中で使うことばの中で最も厳粛な場合である。彼は文に用いた。これは口に用いる。

## 六

以上の見地から、従来問題にされている帚木巻の馬頭の言つた「思し知り<sup>は</sup>へなん」を考えて見たいと思う。

御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の霞などの、えんにあえかなるすぎずきしさのみこそ、をかし

く思さるらめ。今、さりとて七年あまりが程に、思し知りはへなむ。なにがしが賤しきいさめにて、すぎたわめらむ女には心おかせ給へ。あやまちして、見む人の頑なる名をも立てつべきものなりといましむ  
(大成三三・9 全書12段)

## 校 異

青 大底松浦秀三	河 七宮屋平八	別 陽国
侍りなん(松秀三) 侍(はへ)なん(池)	○	はてなん(別)

対校には頭注に「侍り、は文法上如何」とある。全書は本文をその部分だけ「果てなむ」と改めてしまつてゐる。

全書の凡例に「本文は、校異源氏物語の底本、大島雅太郎氏蔵の青表紙本に依り、他の同系統の諸本の本文を参考し、大島本自身の誤説を訂正する事によつて、定家所持本の再建に努めた」また、「右青表紙本の再建に當つて、定家本自身に犯された誤謬と思惟すべきものは、河内本・別本等の諸本の異文を参考し、それ等によつて誤謬の過程が説明し得られる場合には、これを訂正した」とある。すると、この場合、青表紙本も河内本も全部誤謬を犯していると認めて、別本に依つたということになる。玉上教授の源氏物語評釈(本文湖月抄本)には、「聞手を主語にして、尊敬して言うところだから、『はべり』がおかしく感じられる。もっとも「はべり」はまだよくわかつていない語である」と。大系は本文に「思し知り侍りなん」とあつて、補注に「侍り」に誤写があるらしい、「侍りなん」は、恐らく「はてなん」が「はべなん」侍なん

↓侍りなん」となったと見える、「へ」は古筆では「て」に接近している、とあるから結果的には全書と同意見である。

ところで、時枝博士の日本文法論には、「詞に属する敬語「おはす」

「おぼす」「給ふ」(四活活用)等が述語となった場合は、聞手に対する「はべり」を省略することが多い(63頁)とあって、注に、「このこと絶対ではない」とあって、例に源氏物語からは、ここに他に二例をあげていられる。

A さらば、ただかかるふるもの世に侍りけりとばかり、し、ろ、し、め、れ、侍らなむ(橋姫、大成三三・11 全書33段)

校 異

青 大(底) 池内三 河 七尾為平大 別 宮横隆保国阿桃  
侍らなむ 侍らんなん(池) ○ 侍なむ(別)

念仏のついでにも願ひ続けて来たことがなつて、今薫から出生の秘密を聞かせよとせがまれて、感激に「わなな」きながら語り出す弁の尼のことば。

一品の宮の御もののけになやませ給ひける、山の座主御佛法仕うまつらせ給へど、なほ僧都参らせ給はでは願なしとて、昨日ふたたびなむめし侍し。右大臣殿の四位の少将、昨夜夜更けてなむ上りおはしまし

て、後の宮の御文など侍りければ、下りさせ給ふなり(手習大成三云 全書45段)

校 異

青 大(底) 柳三三 河 御七尾平前大鳳 別 宮陽保池国阿桃  
めし侍し ○ せんし侍し(河) せんし侍し(保)

浮舟が保護されている小野の尼君の庵室へ、横川から下衆下衆しき法師ばらがばたばたとやって来て、今日僧都が下山されることになったと報じると、「など俄には」と女房たちに問われて、滅多に下りない僧都が下りるのだから、その理由を、いかにもビッグ・ニュースらしく、わいわいと語るところ、「いとほなやかに言ひなす」とある。

A・Bともに話手と聞手の身分に大きな相違がある。それに話の内容が内容であるため、話手の側では興奮のあまり馬鹿丁寧になることは想像される。一般に使わないこんな「侍り」を使うのはそのためであるに違いない。それなら、そうした人物のそうした場面の心理を表現するために、作者が最初から意図していたものということになる。所で、Bの方では、河内本と別本一本には「せんし侍し」とある。「せんし」(宣旨)は体言であるからこれなら問題はない。もしも青表紙本の「めし」を体言と見ていたら、そんなことはしなかったろう。述語を表わす動詞と見ていたればこそ、この工作があつたのかもしれない。

さて、馬頭の場合であるが、ここでも聞手は源氏とは勿論、頭中将とも身分に相当の開きがあることは「なにがしが賤しいさめ」といっていることでも分かる。

対校の索引に依ると、「なにがし」の用例が34回ある。中5回は、「なにがしのみこ」「なにがしの岳」のように原義通り三人称のもの

で、それを除くと、他の29例は全部自称である。次の通りである。

僧 13 (冷泉院に1、源氏に2、御息所に3、薫に4、中宮に

1、浮舟に1、明石入道が源氏に1、)

守 5 (源氏に1、結婚の仲人に(重屋)3、姉尼に1、)

3 (中宮に1、匂宮に1、女房に1)

馬 頭 2 (源氏らに)

頭 中 将 1 (源氏らに)

夕 霧 1 (玉鬘に)

柏 木 1 (玉鬘に)

文章博士 1 (上達部に)

大夫 監 1 (玉鬘の乳母に)

内 舍 人 1 (薫に)

これは男性語と見える。しかも大勢からすれば、使う者は、漢籍にしろ仏典にしろ、漢字の素養豊かな知識人である。それに、約半数を占める僧の場合を見ても、博士や内舍人の場合を見ても、聞手に対し身分に格段の差のあることである。単なる謙譲だけではなさそうである。

更に注目すべきことは、対校が校異に用いている尾州家本によると、「なにがし」が遣われている所では、屢々「は、へつれは」(浮舟一五・3)、「は、へぬへかりし」(蜻蛉二六・9)、「は、へなる」(若紫一八・2)「は、へめる」(同二五・5)、「は、へしを」(明石七四・9)、「は、へたふ」(少女三三・7)、「は、へなむ」(同上)等「は、へ」の見えることである。

一体会話の中に、漢字「侍」でなく「はへ」と表記されている人物に

は、明石入道といい、柏木といい、薫といい、内典にしろ外典にしろ明かるい人物が多い。入道については「俗の方の文を見はべしにも、また内教の心を尋める中にも(若菜上94段)、柏木には「さる時の有識」(若菜下二五段)、薫には、「法文などの心得まほしき志なむ、いはけなかりし齡より深く思ひ」(橋姫19段)とある。馬頭もまた、相当の知識人であったと見え、「三史五経の道々しき方を、明かに曉りあかさむこそ愛敬なからめ」(帚木15段)と、それらの典籍にすら批判的である。その馬頭が豊富な経験に物を言わせて、「物定め博士とな」って、女について論じ立てるのであるから、「法の師の、世の道理を説き聞か」すような印象を与えたことは当然である。その彼が、いよいよ、その実例として嫉妬深い指喰いの女と浮気者の木枯の女とを、短編小説のようにあざやかに話した後、その締めくくりとして、今後のために一言ご注進に及ぶというのである。「といましむ」とあるのはそのためである。身分の低い者が上に向かって忠告するのだから、いつのまにか語調が一変することも考えられる。「今、さりとて七年あまりが程に」とまことに突つこんだことを言うのだから、「思し知りは、へなむ」と言わなければ納まらなかったであろう。校異篇の本文では、馬頭の使う「侍り」はこれまで全部漢字で表記されているので、ここは、一応かな書きで、「はへりなむ」でもその心持は出るわけであるが、「はへなむ」と更に飛躍しているので従来疑問を持たれたのである。だから別本は「はてなむ」と読んでしまったか、それとも改めたかであろう。一体に、校異篇の校異を見ると、河内本の方は、「侍り」に関する限り忠実である。別本はかな書きの所も漢字に書いたり、時には除いてしまっ

たり、とかく無神経な場合が多い。それからすると、ここも余りに例のない言い方のため、軽々しくそのようにしてしまったとも見られるのである。もっとも大系にも触れているように、これも、「思し知り」を体言と見れば、問題はないが、別本すら当時そうは取らなかったのだから、恐らくそれは考えられないであろう。

七

夕霧の大学入學に際して「字」をつける儀式が、二条院の東院で行われた。当時、字をつけることは儒者の家で行われることになっていたもので、一般の上達部殿上人はそれを見たがって東院に集まった。博士たちもそのため気おくれがしそうなので、源氏は「憚かる所なく、例あらむに任せて、なだむることなく、きびしう行へ」（少女全書5段）と、わざわざ注意しておいた。博士たちは、身体に合わない借物の衣裳ですまし返り、面持ち、声づかいもしかつめらしく、すべて物々しく振舞うので、若い君達は笑い出さずにはいられない。

儒者

「おほし垣下あるじはなはだ非常<sup>A</sup>に侍りたうふ」

儒者

「かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたうふ<sup>B</sup>。はなはだをこなり」

などいふに、人々皆ほころびて笑ひぬれば、また、

儒者

「鳴高し」

儒者

「鳴止まむ。はなはだ非常なり」

儒者

「座をひきて、立ちたうひなん<sup>C</sup>」

など、おどしいふもいとをかし（少女 大成三〇・11・12・13 全書5段）

校 異

侍りたう ふ たうふ たうひな	青 門三 大（底）横平池	河 御七宮大鳳尾	別 讃陽保國麦阿
○	たう（平）たまふ （門三）	はへたふ（河） たまふ（河） たうひはへなむ（御 七宮鳳尾） たうはへ なん（犬）	○ たまふ（保麦團） 侍りたうひなん（保 給なん（麦・阿）

「侍りたうふ」は「侍りたまふ」と同義である。「ある人の動作を、それより上位の話し相手に対し、へりくだって表わすと同時に、自己の立場からその人の動作を尊敬して表現する」（角川古語辞典）。この語は大成の索引によると4例しかない珍しいことばである。他の3例は、

「出家の志は、もとより物し給へるを、はかなきことにおもひとこほり、今となりては、心苦しき女子ともの御上を、え思ひ棄てぬとなむ、歎き侍りたまふ<sup>A</sup>」と突す。（橋姫 大成三五・8 全書15段）

青 大(底) 池肖三	河 御七尾為平大鳳	別 (宮横陽保国麦阿)
侍りたまふ たうふ (池三)	はへたの(御) はへたう(七) はへたふ(尾為平鳳)	「侍り」ナシ(横保麦阿)

阿闍梨が冷泉院に宇治の八宮のことをうわさして申しあげることば。

舌の本性にこそは侍らめ。幼く侍りし時だに、故母の常に苦しがり教へ侍りし。妙法寺の別当大徳の、産屋に侍りける、あえものとなむ、歎き侍りたうひし(常夏 大成全巻・1 全書12段)

青 大(底) 横為池 佐肖三	河 御宮尾富平鳳大	別 陽保国
侍りたうひし 侍たう(ま)ひし(肖)	侍りうたかひし(御)	申侍りたうひし(陽) 申はへりし(保) 侍り給ひし(国)

近江君が、内大臣に早口を何とかならぬかと言われて、自分がそうだったわけを、どきまぎして話すことば。

青 大(底) 横池肖 三	河 御七尾前大鳳	別 宮陽保国麦阿
侍りたうひて 侍りたうへて(池)	たうひて(御) 侍りてたうとひて(七)	給て(宮保国) 侍たくひて(陽) 侍て(麦) 侍てたうひて(阿)

薫の使で浮舟の母を見舞い、浮舟なき後はその弟たちを世話してやろうという薫の厚意を伝えた家司仲信が、薫に復命することば。「」の中はその母が泣いて感激することば。

いずれも話題の人物は話手の目上であり、しかも話し相手の方は、それよりも更に目上であるため、話手がそれぞれの身分関係を考慮して、どちらにも敬意を失しないようにと気を配ったことば遣いである。Aの場合なら、「歎きたまふ」で一応よいわけだが、それでは話手の自分の方はよいが、相手の冷泉院にはすまないから「歎き侍り」といって、二つを合わせたものと見える。まことに肩の凝ることばである。

今博士たちのことばの中、最初のはその一人が「およそ上達部がお相伴の席に着いて饗応を受けることは、甚だ例外なこととおありなさります」と、上達部のことをそれ以上の身分の者―恐らく源氏にでも言っているのであろうか。

一休、「たうふ」という語も源氏物語には数が少ない。大成の索引によると5例である。その中3例はすでに博士のことばに出てしまっている。「非常に侍りたうふ」「仕うまへりたうふ」「立ちたうひなん」である。他の2例は今あげた近江君の「歎き侍りたうひし」と家司仲信の「会ひ侍りたうひて」とである。「たまふ」と同義であってもニュアンスは異ると見えることは、5例中3例まで「侍り」と複合して丁寧過剰の「侍りたうふ」となっていることでも分かる。「たうふ」と殆どニュアンスの同じ語に「たふ」がある。これも大成の索引には3例しかない。

寺（雲林院）にも御誦經嚴しう（源氏ハ）せさせ給ふ。あるべき限り上下の僧ども、そのわたりの山がつまで物たひ、尊き事の限りをつくして出で給ふ（賢木 大成元・5 全書35段）

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、（中宮ヨリノ）禄とりつづきて、（舞ノ）童べにたふ（胡蝶 大成元・14 全書9段）

（宇治ヨリ）帰り給はむとて、昨夜後れてもて参れる絹綿などやうのもの、阿闍梨に（薫ハ）贈らせ給ふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふ物をさへ、召してたふ（宿木 大成元・1 全書75段）

これは3例とも高い身分のものが、遙かに低い者に恩恵として、わざわざ品物を与えることに用いられている。いずれも物々しい行事のあった後で、それが一種儀礼的に行われ、いわば下賜に近いようなものである所に、この語の特殊性が覗われる。助動詞に用いられてもニュアンスは同じはずである。

要するに、あの時博士たちの言ったことば遣いは、「たまふ」の代りに「たうふ」を5回の中3回まで、しかも、上下関係には意識過剰の「侍りたうふ」3回の中、1回を使用しているのである。こうした異常なことば遣いの中に、「なにがし」があることである。この語がそうした中に適しいことは前に述べた通りである。更にまた、前掲大成の校異

で分かるように、河内本では、Aは「は、へたふ」であり、Cは「たうひは、へなむ」「たうは、へなん」と、「はへ」の使われていることが注目される。「はへ」は、「たふ」や「侍りたうふ」や「なにがし」などと調和することばであることが分かるのである。「たうひは、へなむ」の「はへ」に至っては馬鹿丁寧さを通り越して滑稽である。

## 八

「はへ」が以上のような性格を持つ語なら、前掲第二章の表19例の箇所は、人物の心理や場面を理解する上に再検討を要する。漢字の「侍」に書替えられないものがあるのである。殊に使用数の多い薫については、5回中4回まで、結婚後の中君に使っているのだから、彼女に對する薫の微妙な感情を理解する一つの鍵になる。また女性の中には明石上がいる。話題が入道の最期の手紙ということであつたためであらうが、そればかりではないはずである。源氏に交渉のあつた女性では他に紫上に一回（若菜上 大成元・3 全書29段）——これは索引篇一般語彙に見える。女三宮降嫁のことを源氏から聞かされた時の最初の一言の中にある。これからの紫上の運命がこの一語に結晶していることを思わせるのである。あるいはまた、朱雀院が女三宮を源氏に託された期待も空しく、宮に授戒を終えてお帰りになる時のおことばの中に見える（柏木 大成元・9 全書22段）、どんなにか切ない親心を表現しようとしたものかと思われるのである。索引篇助詞・助動詞の部の19例のみでなく、若菜上巻の紫上の場合のように更に索引篇一般語彙の部の残り34例、もしくは青表紙本の他の異本、あるいは少女巻の博士のことば

のように、河内本に見えるものも参考に取りあげるなら、人物の心理とその場の理解に大きな助けになると思う。たとえば尾州家本に依ると、柏木が女三宮の寢室に忍び入ったとき、「あらぬ人なりけり」と知って「わななき」驚き、「水のやうに汗も流れて物も覚え」られない宮に、彼が口にしていたことばは、

数ならねど、いとかくしも思召さるべき身とは思ふ給へられずなむ。

昔よりおほけなき心のはへしを、ひたぶるにこめてやみはへなましかば、心のうちにくたしてやみぬべかりけるを、なかなか漏らし聞えさせて、院にも聞召されにしを、こよなくもて離れても宣はせざりけるに頼みをかけそめはへて、身のがずならぬ一際に、人より深き志をむなしくなし侍りぬる事と、動かし侍りにし心なむ、よろづ今はかひなき事と思ふ給へかへせど、いかばかりしみ侍りにけるにかと（若菜下、対校66頁、傍線・傍点の箇所は校異に採用された尾州家本の表記）

これは一例に過ぎない。このことは今まで余りとりあげられなかった問題であるだけ、物語全体に亘って再検討を要する。

さて、このことばの発音である。「はへし」「はへりし」「侍りし」「侍りし」と校異篇の本文に見えるが、かな書きの二つはそれぞれ「侍し」（これは「侍りし」と同じ発音）と違っていればこそ、わざわざそう表記したに違いない。例えば、夜居僧が冷泉院ご出生の秘密を申しあげる所、校異篇の本文（大島本）は、

天けんおそろしく思給えらるる事を心にむせひ侍<sup>A</sup>つ<sup>B</sup>ついのちをはり侍り<sup>B</sup>なはなにのやくかは侍<sup>C</sup>らむ（うす雲 大成六元・7）

もし御物本（青表紙本）によれば、傍線Aの箇所は「はんへりつつ」で、B・Cはこのままの表記である。すると、御物本では、B・Cが「ハベリ」「ハベラ」と発音するのに対して、Aだけは「ハンベリ」と発音することを示すものと見なければならぬ。この「はんべり」の表記は校異篇の本文には見えないようだが、校異に採用されている諸本には屢々見える。同じ夜居僧のことば、

おととの御ためすへてかへりてよからぬ事にやもりいて侍<sup>A</sup>らむ<sup>B</sup>かかるおい法<sup>C</sup>しの身にはたとひうれへ侍<sup>B</sup>りともなにのくひか侍<sup>C</sup>らむ仏天<sup>D</sup>のつけあるによりてそうし侍<sup>D</sup>なり（同大成三〇・2・3）

耕雲本では、A・Cは「はんへらむ」と表記してある類である。

朱雀院の御賀の試楽に源氏から招かれる柏木が、病いを口実に断つていたのが断りかねてとうとう出たとき、源氏に言うことば、対校（本文・湖月抄本）には、

春の頃ほひより、例も煩<sup>A</sup>ひはべる乱り脚病といふもの、所せく起<sup>B</sup>りはべりて、はかばかしく踏<sup>C</sup>み立つることも侍<sup>C</sup>らず、月頃に添<sup>E</sup>へてしづみ侍<sup>D</sup>りてなむ、うちなどにも参らず、世の中絶えたるやうにて籠<sup>E</sup>り侍る。

ところで、校異に用いている尾州家本には、A Bはいずれも「はんべる」「はんべり」と「ん」の表記のあることを示している。すると、かな書き「はべり」(B)は、「侍り」(D)と異り、「ハンベリ」と発音されたことが明らかである。

一体、なぜ「はべり」が「はんべり」と発音されたか。中田祝夫博士の「古點本の国語学的研究」によると、「日本に用ゐられた漢字音のm・n尾子音が、古くより長い年代の間に大抵使ひ分けられていたのに、鎌倉時代になってからその区別が漸次失はれるにいたつた」(六九頁)、また、「少くとも平安中期に入つて、この区別が一般になくなつたと見るべき確証はないと思ふ。天曆から長保にかけて、この区別が失はれてゐたのではないかといふ説はそのまま同ずることができない」(九三頁)とも言つておられる。

次に、「漢字音を知識的に書き分ける以上、耳の確かな、かつ知識の明確な学者には、国語音の相異もまた感知し得て、(普通人はできぬとしても)これを書き分け得ることもあつたはずではないか。(中略)以上のことは移して土佐日記についても言へることである。貫之の時代の點本では、u・n尾子音の区別がかなり嚴重に行はれてゐたことであり、漢字の素養の深かつた貫之がこれを知らぬはずはない。その知識が、假名文にまで延長してゐると考へてもよいのではないか」(二六頁)と言つて、土佐日記に見える、A・B二種の撥音表記を指摘し、説明される。

Aは、ル・ニなどの撥音化したもので、n尾子音に近いもの、前舌的鼻音、表記は無表記

(1) いひつかふものにもあらざなり(十二月二十三日)

よびにふみもてきたなり(十二月二十五日)

いかにぞといひあへなる(一月一日)

よるありきせざなりとききて(一月三十日)

(2) ししこかほよかりき(二月四日)

Bは、マ行・バ行の撥音・m尾子音に近いもの、両唇的鼻音、表記は

「む」(ん)表記

(1) そもそもいかがよむだる(一月七日)

すすきにてきるきるつむだるなを(一月九日)

神もよむたび(一月二十日)

(2) よむべ(一月九日・二十二日)

おほむともに(二月九日)

をむな(十二月二十三日・一月九日・十一日など)

ふむとき(一月十二日)

今「はんべり」の発音を考えるに参考になることは、Bの(2)「よむべ」である。「よべ」がなぜ「よむべ」となつたかと同じ問題ではないかと思うからである。それについて博士は、「よむべ」などはよべのバの頭子音を契機として生れた撥音と考へるが、この場合など両唇的なことはいふまでもない」(二七頁)と言われる。ところで訓点本の方にもさうしたことがあつて、保延四年点(二六)の文鏡秘府論の訓点に

為 スルトキムハ 行 オコナフトキムハ



のようにムを挿む表記のあることを示し、「後続音バによつてその音の性質が「ン」(注 n 尾子音)とは異なつてみるとみたのであらうか」(二三頁)と言われている。また、春日政治博士は「古訓點の研究」で、金光明最勝王經註釈古點(東大寺・正倉院本)の中に、

若水中月 行菩提行 我亦行菩提行

右の本文に三種の訓み方があつて、その第三訓

水中ノ月ノ若ク菩提ノ行行ゼムマクシテ、我レモ亦菩提ノ行行ジキ

(二三頁)

この「行ゼムマク」について、「撥音使とも見られるが、或は行ゼマクの誤記か、或はム・マクを重複した変訛語法とも思われる」(二元頁)と言われているが、これも「トキム」のムと同じように、後続音に引かれての現象と見ることができないだらうか。つぎに促音であるが、弘法大師作般若心経秘鍵の伝統的な訓み方

心経者 トイハ 初建者 トイハ

等の伝統的な発音は、トイッパである。いうまでもなく、イは古點に多い主語を表わす助詞であらう。これがやはり後継のハの頭子音に影響されて、そこに捉音現象を起すのであらうが、もしそれなら、こうしたことは「よべ」が「よむべ」となるのとは異なり、漢文訓読に親しむ知識人へのみ見える音韻に対する特別な関心の深さを表わすものでなければならぬ。「侍を「はんべり」と発音したのも同じ理由からであつたに違ひない。もつともそうした知識人も、源氏物語の頃には平素は一般人と同じように「侍り」といつていたのである。それを特別な場合に限つて「はんべり」と発音して、この語本来の意味を表わそうとして、発

音の折目を正したのではないかと思う。それが、古めかしくも固苦しくも、また重々しくも響いたのである。元來が対人関係にのみ使われることばであるため、他のことばとは異なり、場合によっては特に折目を正す必要があつたわけである。漢文訓読に直接関係のない女性が使用した場合は、一層謙讓の意味を帯びたことと思う。

先きの柏木のことばは次のように続く。

(中略)「冠を掛け車を惜しまず捨てし身にて、進み仕うまつらむに、つく所なし。げに下臈なりとも、同じごと深き所はべらむ<sup>A</sup>。その心御覽せられよ」と、(致仕ノ大臣)催し申さるる事のはべりしかば、おもし病をあひ助けてなむ参りはべし<sup>C</sup>。今はいよいよとかすかなるさまに思ひすまして、いかめしき御よそひを待ち受け給はむこと、願はしくも思すまじく見奉りはべりしを、事どもをばそがせ給ひて、静かなる御物語の、深き御願ひかなはせ給はむなむ、まさりて侍るべき<sup>E</sup>。

(若菜下二三頁)

尾州家本は、Aは「はんへらむ」、B DはともにC同様「はへし」、C Eはそのままである。珍しい「はへし」が、尾州家本では3回立て続けに使われているのであるが、ここではいろいろの「侍り」の発音が集まっている。

「はへし」にせよ、「はへりし」にせよ、こうして「侍り」がかな書きされているところには、しばしば漢語や仏語があることである。「冠を掛け」「車を惜まず」にはそれぞれ後漢書と孝経が注に見え、その前

には阿之乃介(和名抄)というべき所に脚病(大成本文「かくひやう」大成三四・6「諸本一致」、遺言の所の「讒言」、または夜居僧の所の「天けん(眼)」「仏天」、朱雀院が女三宮のことを心配されて源氏に仰せられるところに「世の中を顧みすまじう思ひはへりし」かど(尾州家本「はへし」)、なほ惑ひさめがたきものはこの道の闇になむ侍り(諸本一致、但し別本のみ「あり」)ければ、行ひも懈怠して、もしおくれ先立つ道の道理(たうり「諸本一致、但し別本一本「こ」)のままならで別れなば(柏木、大成三三・13)、「ことわり」と言わないでわざわざ音読する所、仏語である「懈怠」、また例の博士の所では「おほし」「はなはだ」「非常」と訓読語が連発されている等である。

さて「はへし」の発音であるが、私の想像を許されるなら、ハンベツシではなかったかと思う。中田博士は先きの書物の中、「高山寺藏彌勒上生経贊古点について」の項で、「辞の敬語(侍り・候ふの類)は皆無であるが、これは訓読語の通有の現象である」(九三頁)と言われているので、想像に過ぎないが、地藏十輪経元慶七年(八三三)訓点についての項で、「ラ行四段動詞もまた音便をなしていた」(八五頁)とあって、「己 ヨハテ」「安 イツハテ」等をあげていられる。すると表記はそうであつても、ヨハッテと促音を発音したことになる。「ラ行音便は『因 ヨテ』(石山寺藏法華経義疏長保四年(二〇三)点)の如く無表記の促音便と考へられる。この無表記はタ行ラ行の促音便の場合に平安鎌倉時代の点本にはほとんど規則的にあらはれる。(中略)それは、悉曇要訣(堀河天皇時代成立)によって知られる」(二〇四頁)ともいっている。

それについて思い出すことは、先きにあげた般若心経秘鍵の後に付いている上表文の訓み方についてである。それがいつ時代の訓点に依るのか、私にはまだ調べができていないので、いささか気がひけるが、

于<sup>レ</sup>時弘仁九年<sup>ノ</sup>春 天下大疫<sup>ス</sup>(中略) 昔<sup>シ</sup>予陪<sup>テ</sup>陪<sup>ニ</sup> 舊案說法之筵<sup>ヲ</sup>親<sup>タリ</sup>聞<sup>キ</sup> 是深文<sup>ニ</sup>豈不<sup>レ</sup>達<sup>ニ</sup>其義<sup>ニ</sup> 而已<sup>ニ</sup>

入唐沙門<sup>B</sup>空海上表

(弘法大師全集第一輯三頁)

私は少年の頃、傍線の所、Aはハンベツテ、Bはソレガシと読むように教えられた。伝統のある訓み方らしいことは、「而已」をマクノミと読んだことであつた。(秘鍵の本文にはこの「マクノミ」が三箇所ばかりある)

もっとも上表文は、古来真偽が疑われている。恐らく偽作であろう。文も拙いし、何よりも想が低い。しかし、真偽にまつわる二、三の逸話の中には醍醐の親賢(853~925)や東寺の寛朝(916~998)の名が見える所から、平安中期以後のものであるが、鎌倉期を下ることはないだろう。それはとにかく、偽作にしろ読み方は本文同様、古格を重んじた伝統あるものとすれば、「陪 ハムベツテ」のよみ方は、「はへし」の発音の示唆になる。当時の書き方をすれば、「ハハテ」と書けるからである。

なほ前述の謙遜の自称「なにがし」も漢文訓読から来ているのではないかと思われることである。Bがそれを暗示する。仏教では仏前で三帰

を誓うとき、

弟子某甲 尽未來際 歸依仏 歸依法 歸依僧

諸橋博士の大漢和辞典によると、「某 それがし、なにがし」とあつて、

その⑥に「自己の謙称、〔礼、曲礼下〕使者自称曰某」とあり、「某甲」の⑦に、「自称の代名詞。それがし、わたくし。〔碧巖集、第九則〕僧云、

某甲不問這箇州」とある。「某啓 私、申上げます。拜啓の意。〔蘇

軾、与李公牋書〕某啓示及新詩」とある。更に、その謙讓の程度については、〔礼、玉藻〕凡自称、云云、諸侯之於天子、曰某土

之守臣某、其在辺邑、曰某屏之臣某」とある。特に傍線の語については、「九州外（蛮夷）の君長が天子に対して言ふ自称の語」と説明が

ついでのでわかるように謙讓よりは恭敬である。「弟子某甲」は「弟子法雲」と実名をいうよりは更に深い敬意を仏に表わすことになる。上表文のBをソレガンと読むのもそのためである。

もしそれなら、源氏物語のような全体が女房ことばで語られている中で、そうした漢文訓読から来た語彙、あるいはその影響を受けた発音が交じるとなると、そこだけは異様な色を帯びて、登場人物の人物柄なり、事件に対するその人物の態度なりが、物語の享受者―女房達には当時とはしかに生き生きとしたイメージを与えたに違いない。

以上は、私の源氏物語理解についての一つの語彙の考察にしかすぎない。このことは他のすべての語彙についても言える。私たちが現代語に感じるような感覚でこの物語のことばに触れない以上、所詮は翻訳的な理解にすぎないであろう。しかし、これは一試論にすぎない。大方の御批正を仰ぐばかりである。

―一九六一・四・三〇―